



今月は、「自然や馬から伝わるもの」や「子育て」にロマンを抱き、まるで阿蘇のお父さんをイメージさせる
梅木康裕さんをご紹介します。

Q 若者と馬を描いた映画「風のダドゥ」(平成18年放映)で制作に貢献された梅木さんですが、馬とはどのような関わってこられたのでしょうか。

馬の仕事を始めると30年になります。15年程前から馬の持つ独特な力を感じていました。子育てと一緒に、トレーナーである人間の気が短いと、気の短い馬になります。のんびりだと馬の血統もありますが、のんびりになっちゃいます。自分を表す鏡みたいなものです。
ヨーロッパでは、馬は陸のイェルカと言われ、人とコミュニケーションを細部にわたってとれ

る動物でドイツでは古くから精神医療に馬が使われています。そこで、通常の業務以外に不登校の少年や、働けなくなっている若者を預かって、馬と関わりながら自学の中で学校に復帰、社会参加が出来るように手伝ってきました。5年前全国活動が出来るようにするため、東大農学部、京大農学部、東大農学部の局博一教授、登校拒否文化医学研究所の高橋良臣先生、脳の疲労を研究されている関西福祉科学大学の倉恒弘彦博士等と、アニマルセラピー学会を立ち上げました。それとともに内閣府よりNPO法人ホームフレインズの認定を受け、馬づくり、つまりセラピーホースを育てること

とで副理事にさせて頂いています。全国に馬で活動している人は沢山いますが、課外活動、あるいは学習と、セラピーを主にした所は少ないのが現状です。
映画「風のダドゥ」については、馬だけでなく、阿蘇という自然の中でやっているロケーションも映画にとってはよかったです。しょうね。製作の1年前からコソタクトがあり、台湾の手直しにも参加させて頂きました。馬に嘘のない映画で、本当の競走馬を移動させ、4ヶ月の調教で主役馬をつくり、主役の木村文乃さんに騎乗して頂きました。角川映画からDVDにもなっています。阿蘇の人たちにとっては当たり前の自然ですが、もう一度見直すチャンスですね。

そんな馬たちがいることも少し理解して頂き、阿蘇市の小学校で現在、「セラピー事業」が取り入れられています。全国初の事業で、児童たちが馬とふれあうことで自立心・安堵感が芽生えてきて癒される感覚に浸ることが目的です。
『調・伝・褒・尊』の4つの心配りなんです。
調べるは、単に観察するだけでなく推察、查察、洞察に心を配ると、次の伝えるが分かってくる。確に伝えること、つまりアドバイスを出来ます。馬がそのアドバイスを自ら学んで出来たことを褒める様になります。この事で強制でなく馬が理解しえるためには、馬を尊重しなければなりません。
学校は教育を、家庭では調伝をする。地域は見守る。この連携が大切と考えます。町村合併から3年間、会長をさせて頂き、関係各位のお力を頂き、組織作りを邁進してまいりました。
今後は、実行の時と思ひ、行動を主とした行事を行っていかうと考えています。心からの指導と鞭撻の程よろしくお願ひ致します。



梅木 康裕さん
(59歳 湯浦)

- プロフィール
乗馬クラブ「夢・大地グリーンバレー」オーナー
- ・NPOホースフレンズ事務局 副理事
 - ・社会文化功労賞授賞
 - ・阿蘇市青少年健全育成市民会議 会長
 - ・阿蘇市虐待防止等連絡協議会 副会長
 - ・熊本県騎馬赤十字奉仕団 委員長
 - ・九州騎馬救護隊 副隊長
 - ・阿蘇市準倫理法人会 副会長

この映画同様、親の役割はすごく大きく影響します。学校は

Q 阿蘇市青少年健全育成市民会議の会長として、親の役割をどう考えられていますか

この映画同様、親の役割はすごく大きく影響します。学校は